

博多 143

— 博多遺跡群第190次調査の報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1126集



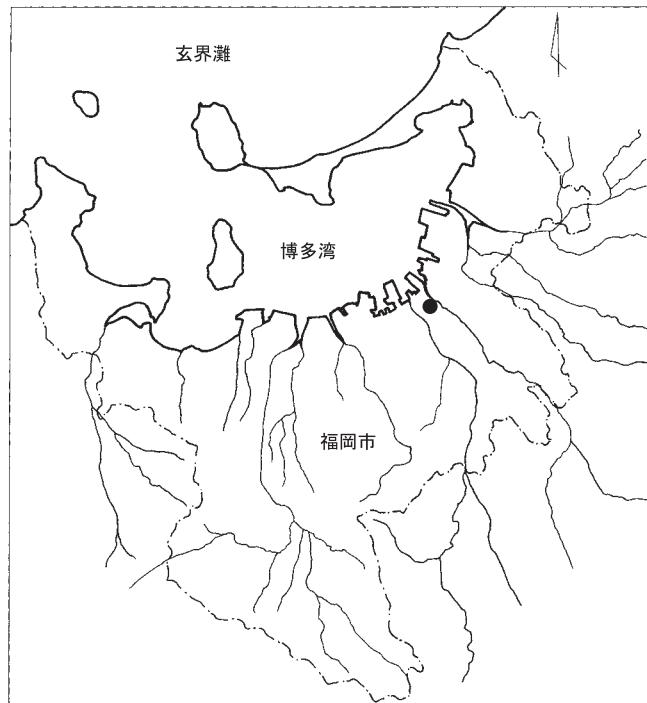
2011

福岡市教育委員会

博多 143

— 博多遺跡群190次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1126集



遺跡略号 HKT - 190
調査番号 0935

2011

福岡市教育委員会



聖福寺仏殿（西より）



発掘調査風景（第2区）

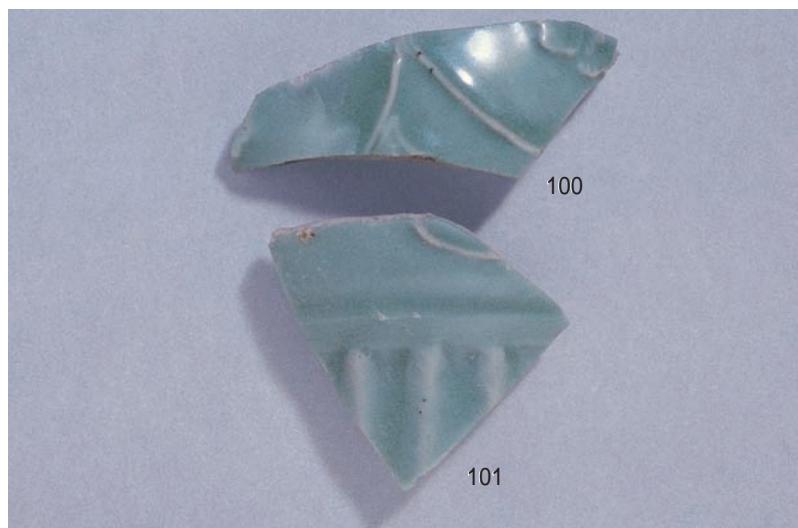


第4区焼土面と整地層（4A区）



148 4区 SP24
149 4区 SK34
150 4B区23~25層
151 4区 SP33
152 4区 SD15

青白磁梅瓶



100 4区掘削
101 3区トレンチ

青磁花生



97 4区 SP18
98 4B区上層~下層
99 4区 SK34~砂層
153 4B区上層~下層
154 4区 SP33
155 4区掘削

青磁香炉

序

玄界灘に面して広がる福岡市には、中国・朝鮮半島との長い交流の歴史を誇る遺跡や遺物が数多く残されています。博多区の都心部に広大な寺域を有する安国山聖福寺もそのひとつで、宋から禅宗を携えて帰国した栄西が創建したわが国最初の禅宗寺院です。日本の禅宗は、ここ博多の聖福寺から京都・鎌倉そして全国に広がりました。

聖福寺境内は、禅宗寺院の伽藍配置を良くとどめるものとして、昭和44年11月7日に国史跡に指定されました。境内には江戸時代以来の古い建造物が多く残り、豊かな緑とともに都会の中の別天地といった趣を醸しています。

平成21年、2015年の栄西800年忌を迎えるに先立って、聖福寺では丈六の阿弥陀三尊像の造像とそれを安置する仏殿の大がかりな改築を計画されました。聖福寺仏殿は、建造物としての文化財指定がなされていないとはいえ、史跡「聖福寺境内」を構成する重要な要素のひとつであり、寛文13年＝1673年に建てられた福岡市最古級の建造物です。福岡市教育委員会としては、何とか現状で保存する方策はないか、聖福寺・文化庁とも協議を重ねてまいりましたが、寺觀を整えて栄西800年忌を迎えるとする聖福寺の熱意は強く、一方で史跡の景観、地下遺構の保存には十分なご理解とご配慮をいただくことができたことから、仏殿の保存は断念することとなりました。

本書は、四方に拡大される仏殿基壇の拡張部分に対して、文化庁からの指示を受け福岡市教育委員会が実施した発掘調査の成果を報告するものです。調査面積は限られましたが、史跡「聖福寺境内」においては唯一の発掘調査であり、聖福寺の研究さらには中世都市博多の研究に対して資するところは大きいものと思われます。

本書が市民の皆様の文化財に対するご理解を深めるだけでなく、学術研究の分野においても広く貢献できれば幸いです。

発掘調査・整理報告に際しまして、宗教法人聖福寺を初め多くの皆様のご理解とご協力をいただきましたことに深く謝意を表します。

平成23年3月18日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例言・凡例

1. 本書は、国指定史跡「聖福寺境内」（福岡市博多区御区所町6）における仏殿改築にともなって、文化庁の指示で福岡市教育委員会が実施した博多遺跡群第190次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には大庭康時があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は比佐陽一郎・大庭が、遺物実測図は大庭が作成し、製図した。
4. Fig.1・Fig.4は福岡市が管理する道路台帳地図（1/500）、Fig.2は福岡市教育委員会2007年刊行『聖福寺の建造物』所収挿図、Fig.3・Fig.5は仏殿改築にあたる三林工務店提出の計画図面を下図とした。
5. 本書に使用している座標は、国土座標日本測地系を用いている。また、遺構実測図に用いている方位も、これによっている。
6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7. 本書に使用した写真は、比佐・大庭が撮影した。
8. 本調査にかかる記録・遺物類は、整理・報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理する予定である。

遺跡調査番号	0935		遺 跡 略 号	HKT 190	
調査地地番	博多区御供所町6		分布地図番号	天神49	
開発面積	376m ²	調査対象面積	164.5m ²	調査実施面積	56.0m ²
調査期間	2010年2月15日～3月3日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	3
3. 調査地点の立地と歴史的環境	3
第二章 190次調査の報告	5
1. 発掘調査の方法と経過	5
2. 調査区の概要と検出遺構	6
(1) 第1区	6
08号遺構	6
09号遺構	8
(2) 第2区	8
32号遺構	10
(3) 第3区	11
03号遺構	11
(4) 第4区	12
18号遺構	15
23号遺構	15
27号遺構	15
28号遺構	15
29号遺構	15
33号遺構	15
34号遺構	15
35号遺構	15
3. 出土遺物	18
弥生時代の遺物	18
須恵器	18
土師器・瓦器	18
国産土器・国産陶磁器	19
白磁・青白磁	23
青磁	23
陶器	24
瓦	24
石製品	24
人骨	24
錢貨	24
第三章 まとめ	24

第一章 はじめに

1 調査にいたる経過

福岡市博多区御所町に所在する安国山聖福寺は、栄西が宋から禪宗を導入して帰国し、最初に立てた禪宗寺院とされ、今もなおJR博多駅と博多港の間に広がる都心部において広大な寺域を誇っている。昭和44年には、禪宗寺院の伽藍配置を典型的にとどめるものとして、境内地が国史跡に指定された（昭和43年11月1日答申、昭和44年11月7日付官報第12868号、文部省告示第329号）。

平成15年1月聖福寺から境内の建物が修理・補修の時期に来ており、栄西800年忌にむけて開山堂の改築を計画している旨の話が福岡市教育委員会文化財整備課に対して出された。文化財整備課では、聖福寺境内の建造物に近世に遡る建物が少なくないことから、境内建物が史跡の構成要素とみなしうるか否かを判断するため、建造物調査に着手した。調査には平成15年度から18年度の三ヵ年を要した。

この間、聖福寺では、平成16年10月 - 開山堂屋根修理、10月・11月 - 墓改修、平成17年9月 - 禅塾門屋根改修、平成17年10月 - 総門屋根改修、平成18年10月・11月 - 山門屋根改修と改修工事が相次いだ。そして、平成19年4月、建造物調査の成果報告書である『聖福寺の建造物』を聖福寺に持参した折、住職から仏殿拡張の計画が出たのである。これは、平成15年1月に話があった開山堂改築に変わるもので、栄西800年忌に合わせて、仏殿に丈六の三尊仏を安置し、同時に仏殿を拡張、改修するというものであった。

平成19年11月三林工務店が福岡市役所に来庁、仏殿の改修計画図面を提示した。平成20年3月には、三林工務店を通じて、現状変更申請書と設計図面が提出された。工事内容は

既存の仏殿を解体して四方に一間ずつ拡張。基壇は既存のものを利用する



Fig.1 史跡「聖福寺境内」範囲 (1/5000)

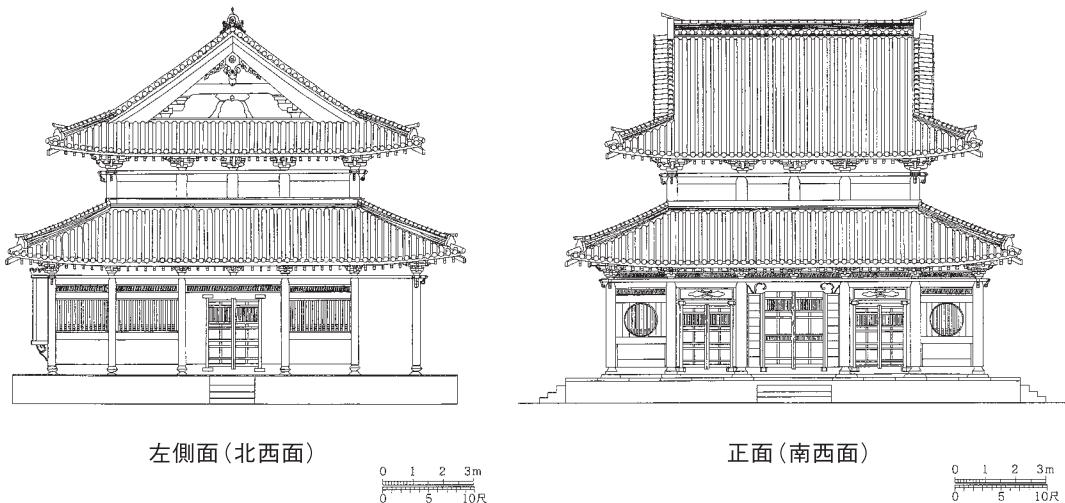


Fig.2 聖福寺仏殿外観立面図 (改修前)

増築部分は現状地盤の上に基壇を新設、掘削は伴わない

外観としてはなるべく既存の仏殿を再現し、周辺の建物と調和した構造とする

柱・梁・化粧材・構造材等既存の仏殿の古材を70%程度再利用する
というものであった。

福岡市教育委員会では、現在の仏殿が寛文13年(1673年)に建立された建造物であることから、福岡県教育委員会、文化庁記念物課と連絡を取りつつ、有形文化財としての指定も視野に入れて聖福寺側と協議を持った。

しかし、指定・現状保存に対する聖福寺の抵抗は強く、理解を得るにはいたらなかった。

一方、改修に際しては、建物が四方に拡張されるものの、高さの変更はなく、以前の建物の意匠を引き継ぐなど、景観に一定の配慮がなされていること、掘削工事を伴わず史跡としての地下遺構には影響を与えない点から、仏殿改築は止むなしとの結論に至り、現状変更手続きを進めた。

これに対し、文化庁では、平成21年12月17日付21受庁財第4号の425において、以下の条件をつけて現状変更を許可した。

- 1 工事の着手は、福岡市教育委員会による基壇拡張部分等の発掘調査の終了後とすること。
- 2 上記の発掘調査の結果、重要な遺構などが検出された場合は、設計変更等により、その保存を図ること。
- 3 施工に際しては、福岡市教育委員会職員（埋蔵文化財担当）の立会いを求めること。
- 4 その他、実施に当たっては、福岡県教育委員会の指示を受けること。

これを受けた聖福寺と福岡市教育委員会は協議を重ね、平成22年2月15日より発掘調査に着手した。

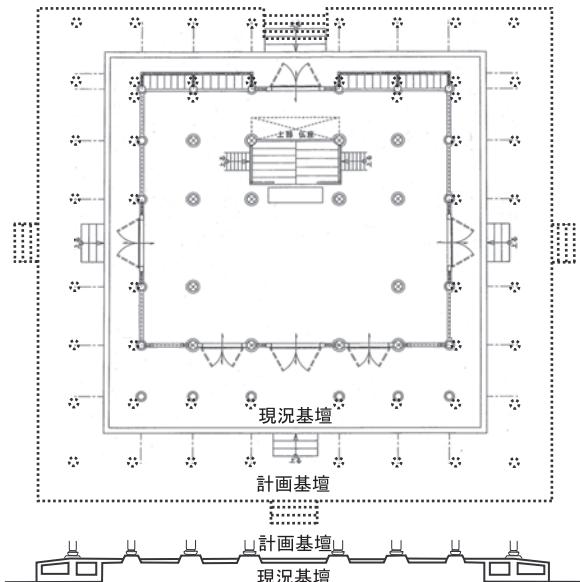


Fig.3 新旧基壇・柱配置 (1/300)

2 調査組織

調査主体	福岡市教育委員会 教育長	山田裕嗣
調査総括	文化財部長	宮川秋雄
	文化財整備課長	井澤洋一（平成21年度）・秋吉 誠（平成22年度）
庶務担当	文化財管理課管理係	山本朋子（平成21年度）
	文化財整備課第1係	牛原 浩（平成22年度）
調査担当	文化財整備課第1係	大庭康時・比佐陽一郎

3 調査地点の立地と歴史的環境

国史跡「聖福寺境内」は、博多遺跡群の東縁辺に位置する。博多遺跡群は、中国・朝鮮との貿易で栄えた中世都市博多の遺跡である。博多遺跡群に関する詳細は、本書末尾にあげた参考文献を参照いただくとして、聖福寺を主として歴史的な立地・環境について触れておく。

博多遺跡群は、博多湾岸に形成された不連続砂丘列の上に立地し、弥生時代前期以来現代に至るまで、ほぼ間断なく人間の営為がみられた遺跡である。

博多湾付近は、原始・古代から朝鮮半島・中国大陆との交易の歴史を誇ってきた。とりわけ7世紀後半、白村江の戦い以降の外交において、筑紫館（後の鴻臚館）が設置されたことで、古代日本の唯一の公的窓口の位置付けを得たことは特筆に値する。鴻臚館は、その当初こそ遣唐使・遣新羅使、唐・新羅からの使節が滞在し、対外公館、迎賓館として機能したが、これら遣使の往来が絶えた9世紀後半以降は、日本に来航した中国商人らの滞在施設、交易拠点と化した。この段階での貿易は、国家（出先としての大宰府）による管理貿易であったが、11世紀中頃、鴻臚館が廃絶すると、それに変わって博多が貿易拠点として登場することになる。日宋貿易に携わった宋商人らは、博多の一角に博多津唐房と呼ばれる居住区を作り、博多を拠点として宋との間を往来した。華僑の先駆的形態である。彼らは、さまざまな物資のみではなく、故郷である中国南部の信仰・文化も持ち込んだ。

一方、国家による遣使が絶えた後も、仏教の聖地を巡礼し、教義を探求する仏教僧の渡航は続いた。それは、宋商人の船に便乗したもので、密教僧として渡航を志した栄西もその一人であった。

仁安三年（1168）2月8日渡宋を志した栄西は、「博多唐房」に至り（『栄西入唐縁起』）、出航を待つた。栄西は文治三年（1187）から建久二年（1191）にいたる二度目の渡宋を果たすと、禅の興隆を企て建久六年（1195）博多に聖福寺を創建した。建久六年六月十日付の「栄西申状」によれば、聖福寺は宋人が堂舎を建立した旧跡である博多百堂の地に建てられたという（『鎌倉遺文』、偽文書とされるが聖福寺創建にかかる伝承としてしばしば引用される）。かつて、聖福寺境内からは骨蔵器が出土しており、百堂を墳墓堂と見て、宋人の葬地が存在したと考えられている。すなわち、聖福寺は宋商人の援助のもと、彼らの葬送の場の跡地に建てられたということになる。

博多遺跡群の発掘調査では、博多の砂丘を縦断する中世後半のメインストリートが検出されているが、これは聖福寺とその南に並ぶ承天寺（円爾弁円開山、仁治三年＝1242創建）の前面を南東から北西に通る。また、聖福寺・承天寺の背後は、松原となって北の箱崎方面まで続いていたようで、発掘調査の所見でも、博多遺跡群と箱崎遺跡群の間には、中世の遺跡は発見されていない。

すなわち、聖福寺は中世都市博多の中核であると同時に縁辺を画していたわけで、都市空間の要となっていたといえよう。

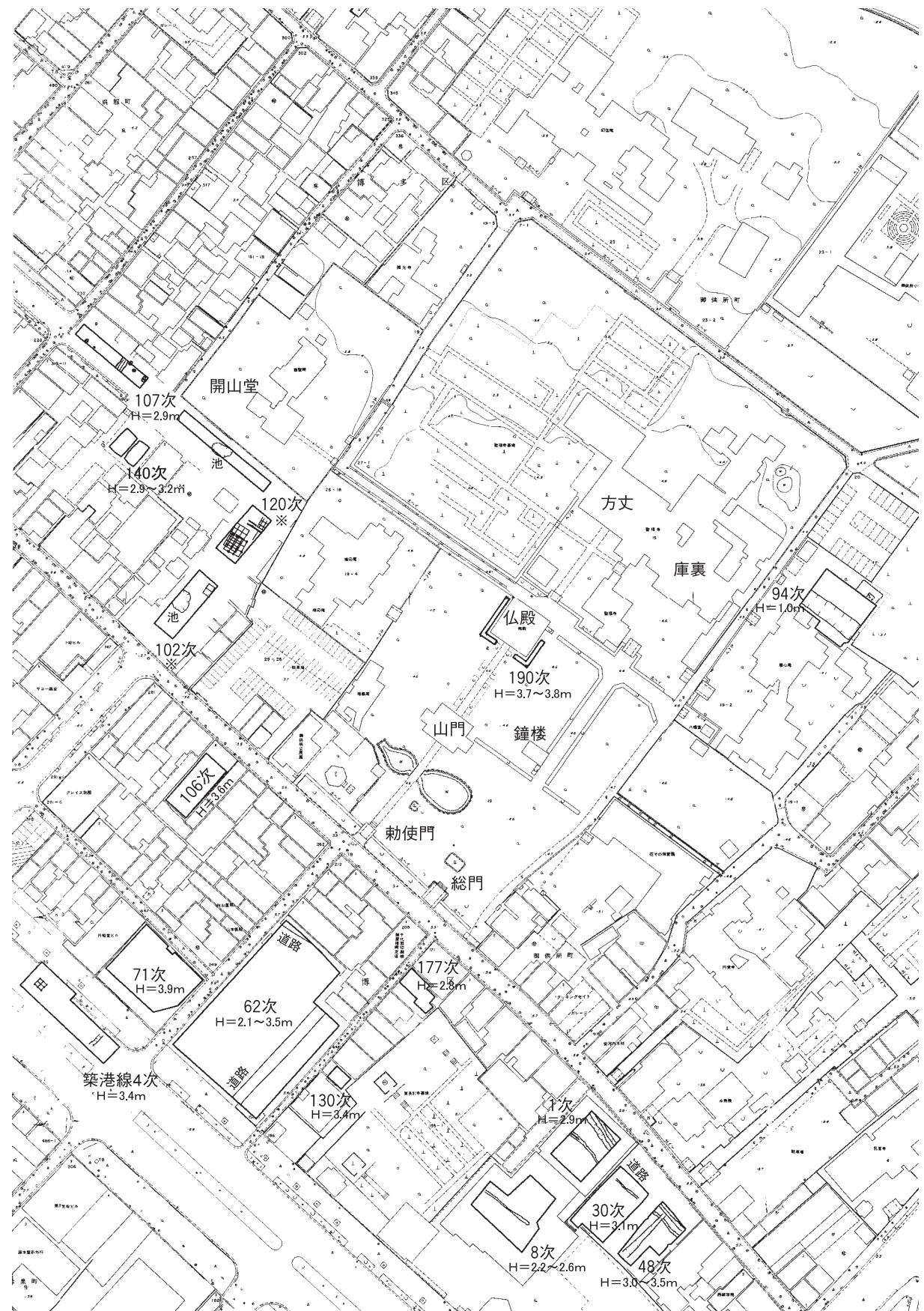


Fig.4 聖福寺とその周辺の発掘調査地点 (1/2000)

H = m は地山砂丘の標高
※ は谷地形で砂丘が検出されなかつことを示す

第二章 190次調査の報告

1 発掘調査の方法と経過

発掘調査は、仏殿基壇拡張部分を対象とするため、現況仏殿の周囲に限定された。実際には、仏殿背面側は、境内の通路となっており、交通路を確保する必要から調査対象から除外した。また、仏殿は、調査期間中も公開されており参詣者があることから、基壇正面階段の前面を掘削することはできなかった。さらに安全確保の観点から、現況基壇から1m程度の引きをとって調査区を設定することとした。その結果、現況基壇の三方に、幅150cmの「コ」字型の調査区を設定するにとどまった。なお、仏殿向かって右側面の背後側半分には、景石が据えられており、その合間に縫って調査区を設定するのは事実上成果が望めないと判断されたため、調査区からはずした。以上により、調査区はFig.5の配置となり、仏殿向かって左側から第1区～第4区とした。

調査の基本方針としては、遺構面の検出・確認を目的とし、遺構面を検出した場合、下層への掘り下げは原則として行なわないこととした。また、掘削深度の目安を現地表下30cmにおいて。これは、砂質地盤の掘削における安全勾配を45度とし、調査区底面で遺構検出および検討が可能な幅を100cmとした場合を想定した深さである。ただし、30cmの掘削深度では遺構面の検出・確認が不十分な場合、および下層の堆積状況等を確認する必要が生じた場合には、調査区内に適切な箇所を選び、掘削・精査を実施することとした。

発掘調査には、平成22年2月15日に着手した（予定調査期間、実働12日）。表土は、バックホーで調査担当者立会いで掘削し、以下については人力で掘り下げ精査をおこなった。

個別の遺構については、調査区を横断して、検出順に通じて遺構番号をつけ、遺物を取り上げた。

遺構実測に当たっては、調査区が溝状で狭長なことから長軸に沿って任意の基準軸を設け、基準点を国土座標で測量した。各区ごとの遺構全体図は20分の1、個別の遺構については10分の1で実測図を作成した。

発掘調査は3月2日に終了、翌3日に機材を撤収した。

調査面積 56.0m²

出土遺物 コンテナ7箱

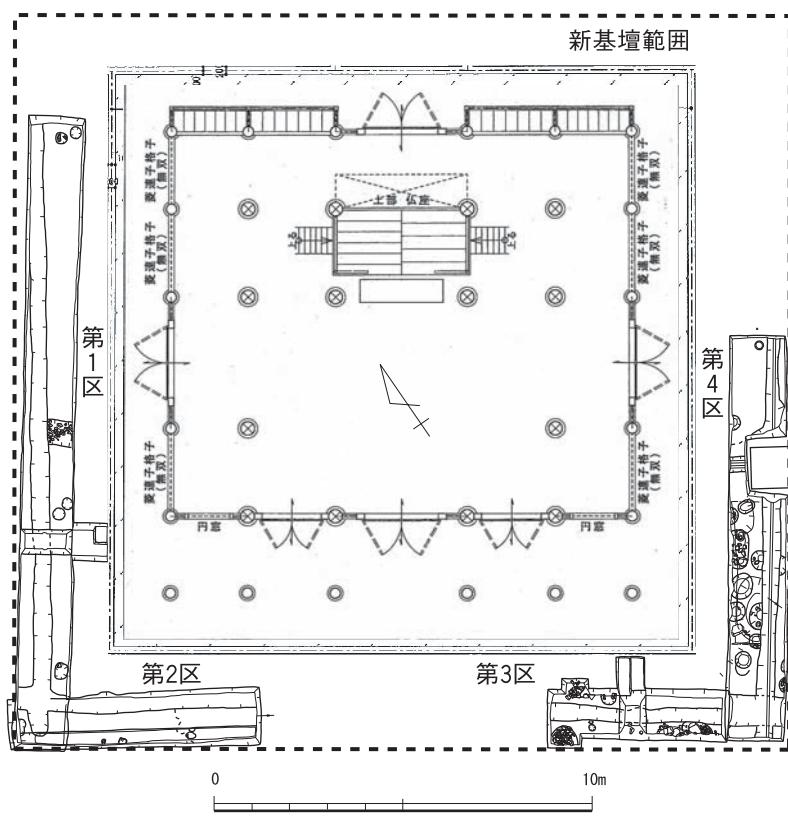


Fig.5 調査区配置図 (1/200)

2 調査区の概要と検出遺構

以下、調査区ごとにその成果と遺構の概要を、節を改めて遺物についてまとめて報告する。

(1) 第1区

第1区は、仏殿の向かって左側面に設定した調査区である (25.2m^2)。

現地表下40cm前後でピット、集石溝等を検出した。検出面は、黒褐色砂質土である。黒褐色砂質土は、土層実測図に見るように標高4.6m以下に堆積しているところから、本来は検出面の15cmほど上位で設定すべき遺構面である。

遺構密度はきわめて低い。近世・近代の瓦片などが採集できたが、中世にさかのぼる遺構は検出できなかった。調査区を縦貫する13号遺構 (SD13) は鉄管を埋置したもので、現代の所産である。集石溝 (09号遺構 = SS09) は、現仏殿の下に伸びており、これに先行する遺構と考えられる。

全体に近・現代の遺構が検出されたものと思われるが、仏殿基壇の整地状況や現基壇に先行して存在したはずの仏殿の遺構が確認できなかったところから、調査区の中ほどにトレーニチを設けて下層の状況を探った。その結果、現基壇の造営に伴う Fig.7 土層図 3 層の下には整地面は存在せず、黒褐色の砂質土が続いていることを確認した。

08号遺構 (Ph.2)

第1区北東端付近で検出したピットである。軒平瓦の瓦当が出土した (Fig.20-120)。遺物を取り上げたのみで掘削はおこなっていない。



Ph.1 第1区全景 (北東より)



Ph.2 08号遺構 (北西より)



Ph.3 第1区トレーニチ (北東より)

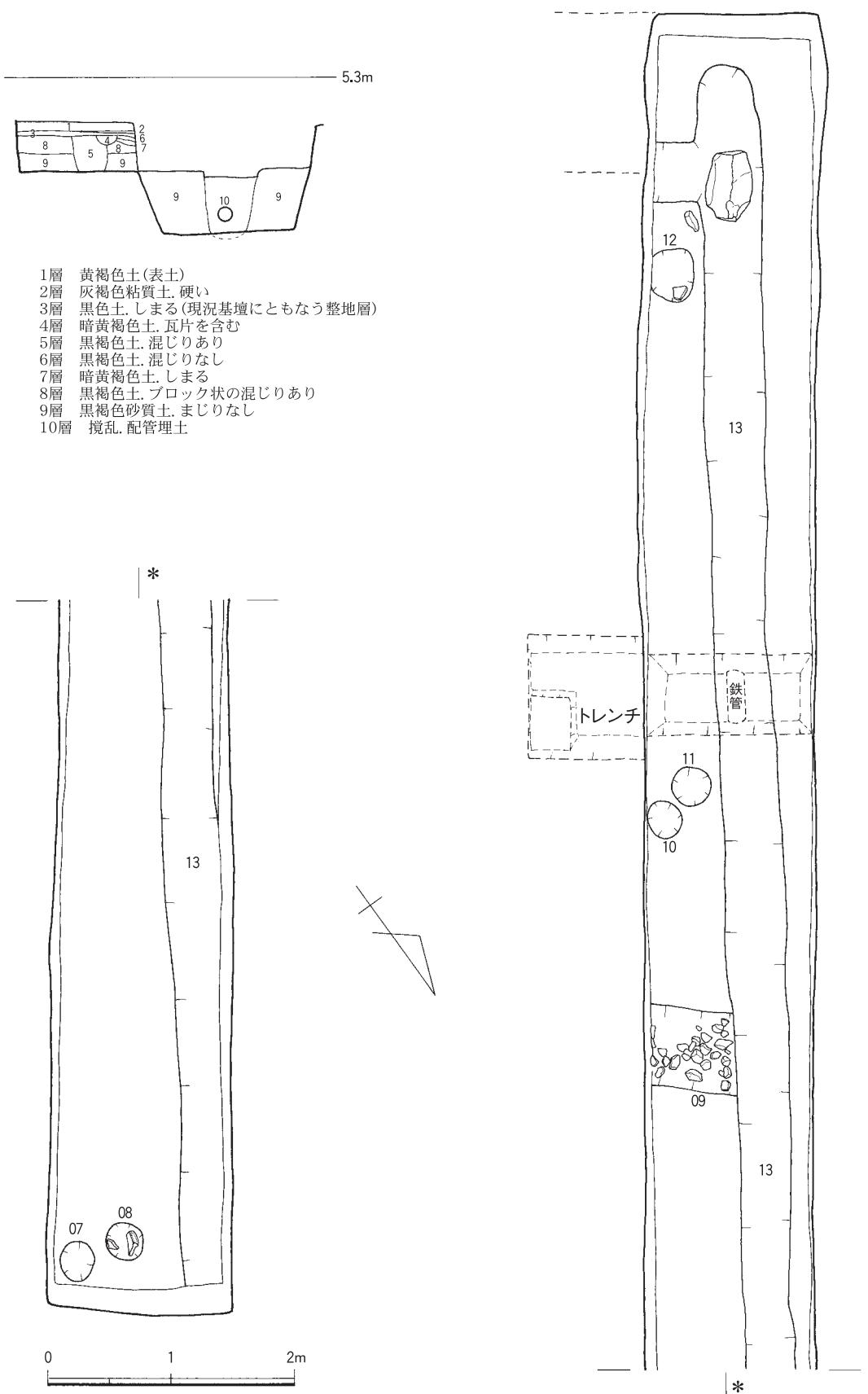


Fig.6 第1区全体実測図トレーンチ南西壁土層実測図 (1/50)

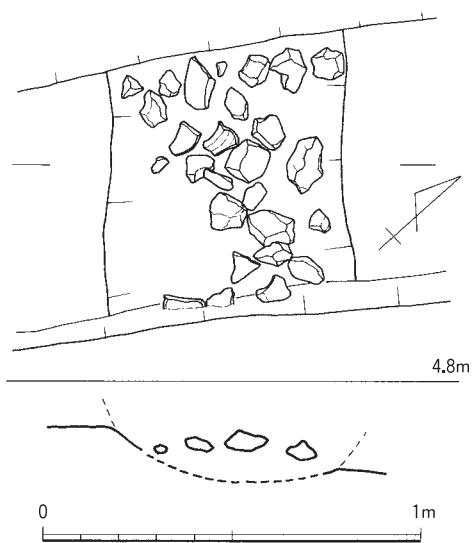


Fig.7 09号遺構実測図 (1/20)



Ph.4 09号遺構 (北西より)

09号遺構 (Fig.7、 Ph.4)

第1区に斜交して検出した集石遺構である。浅いレンズ状のくぼみをともなうことから、溝内に廃棄された礫群と見られる。現基壇の下に向かってのびており、これに先行するものと考えられる。

礫の間から瓦質土器の湯釜が出土している (Fig.15-29)。16世紀代に位置付けられる遺物である。

(2) 第2区

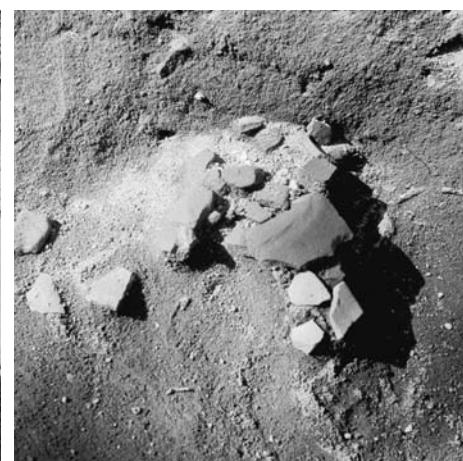
第2区は仏殿正面、基壇階段の向かって左側に設定した調査区である (7.5m^2)。

標高4.45m (現地表下50cm) で黄灰色粘土による硬化面を検出した。この標高を目安として遺構検出を試みたが、明瞭な遺構は検出できなかった。硬化面は、整地による生活面と考えられるが、調査区南側の2m程度の範囲で見られたのみで、広がりは確認できなかった。また、前述した様に連続する1区ではまったく整地面は見られなかった。

そのため、調査区南西壁に沿って、幅40cm程度のトレンチを設けて層序の検討をおこなうと同時に、下層の状況の把握を試みた。粘土を貼った地業による硬化面 (30層) は、土坑状の遺構に切られ失われてはいるが、その北側では確認できず、本来広がりを持たなかつことが判明した。また、標



Ph.5 第2区全景 (北より)



Ph.6 32号遺構 (東より)

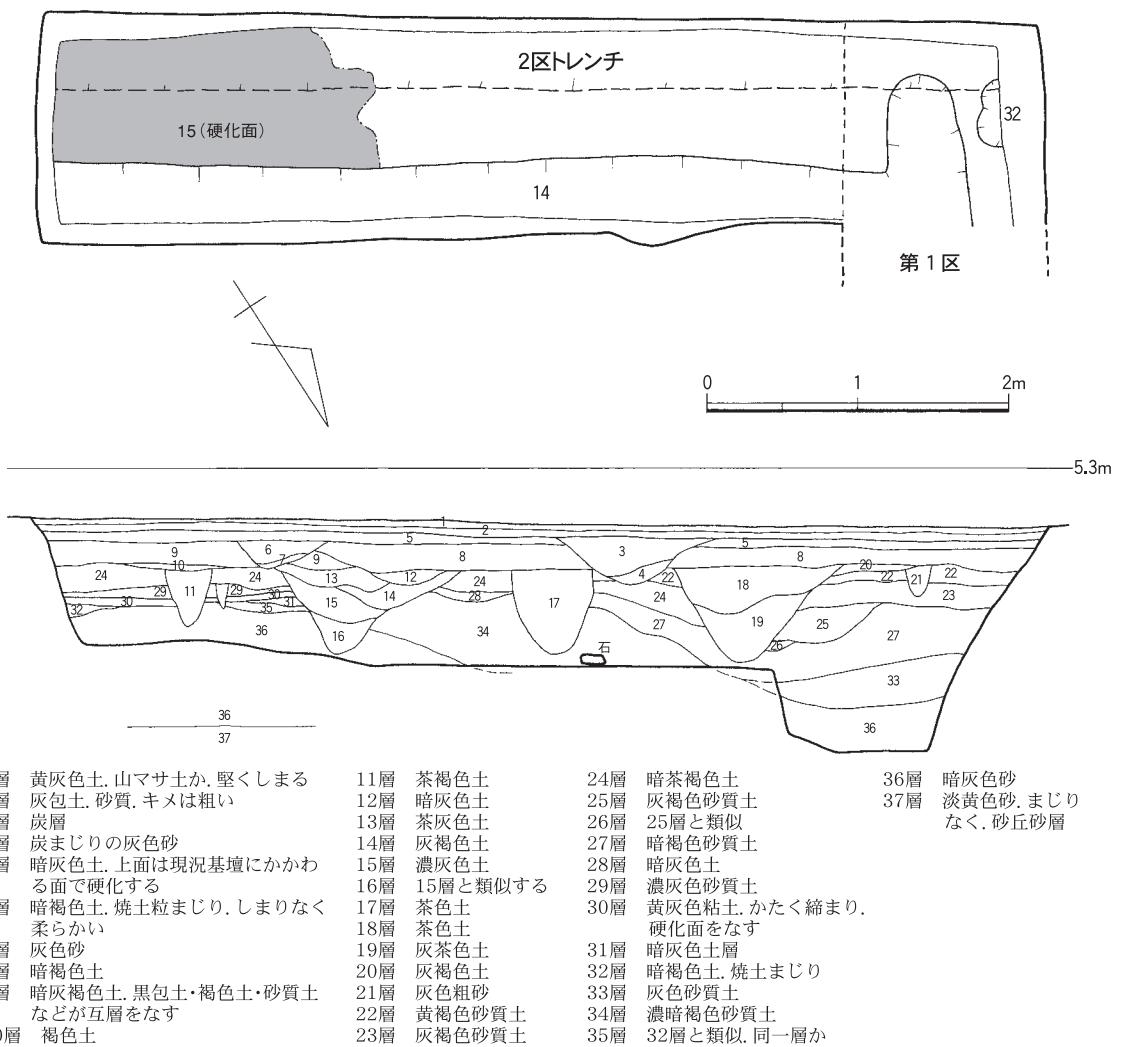
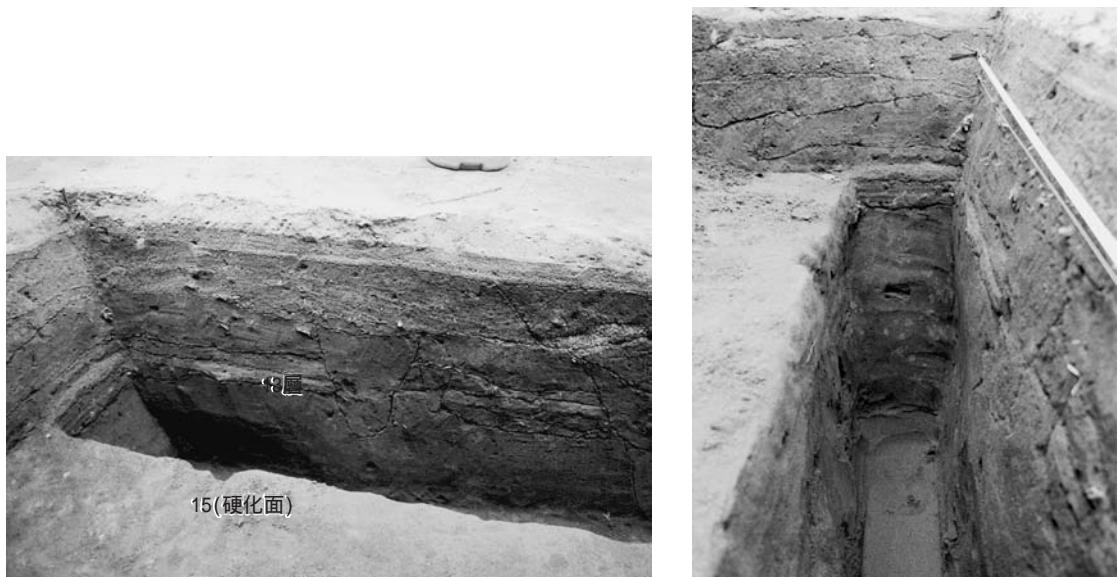


Fig.8 第2区全体実測図・トレーニング南西壁土層実測図 (1 / 50)



Ph.7 第2区硬化面・土層断面 (北より)

Ph.8 第2区トレーニング (北西より)

高4.3m以下は砂質土の堆積であり、生活面は認めがたい。したがって、現基壇に先行する整地面としては、30層の一面が想定できるに過ぎない。

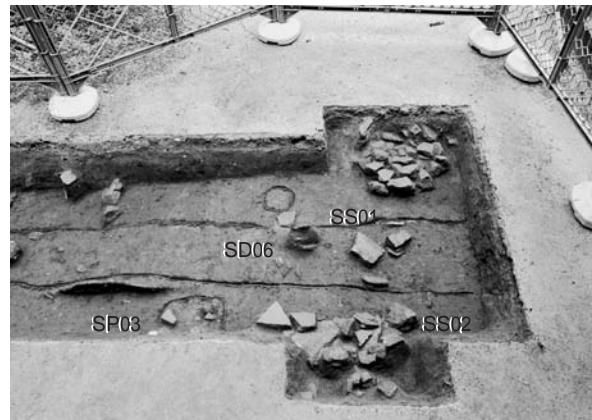
なお、トレンチ南端で砂層を掘削して確かめたところ、標高3.8m付近で砂丘上面に当たる白色砂を検出することができた（37層）。

32号遺構（Ph.6）

調査区北西端で検出したもので、土師器の皿がつぶれた状態で出土している（Fig16-45・48）。中世末の所産であろうが、時期は決めがたい。



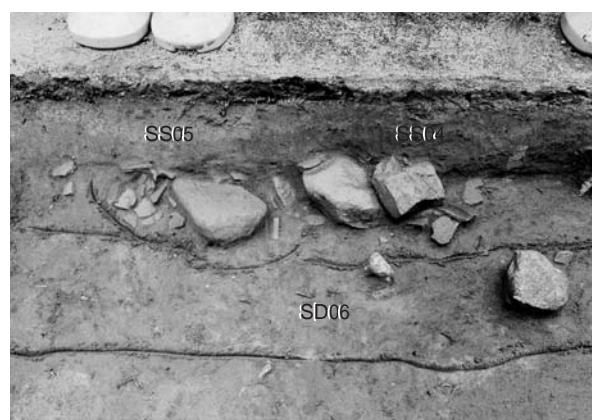
Ph.9 第3区全景（北より）



Ph.10 01号遺構・02号遺構（北東より）



Ph.11 03号遺構（南西より）



Ph.12 04号遺構・05号遺構（北東より）



Ph.13 第3区トレンチ 配管埋土 = 7層・8層・9層



Ph.14 第3区トレンチ土層、現基壇基盤層

(3) 第3区

第3区は仏殿正面、基壇階段の向かって右側に設定した調査区である ($7.05m^2$)。

現地表下30cmで遺構面を設定したが、土層図によれば20cm（標高5.0m）に検出面があつたものと考えられる。01号・02号・04号・05号遺構など、建物礎石あるいはその根固めと思われる集石遺構が出土している。散布する瓦破片から推して、近世の遺構と思われる (Fig.10・11、Ph.10・12)。

調査区を縦断する溝状遺構（06号遺構）は、底から鉄管が検出されており、1区13号遺構、2区14号遺構と連続した配管とみられる。

03号遺構 (Ph.11)

近世の柱穴状ピットである。プリントの肥前染付けが出土した (Fig.15-36)。

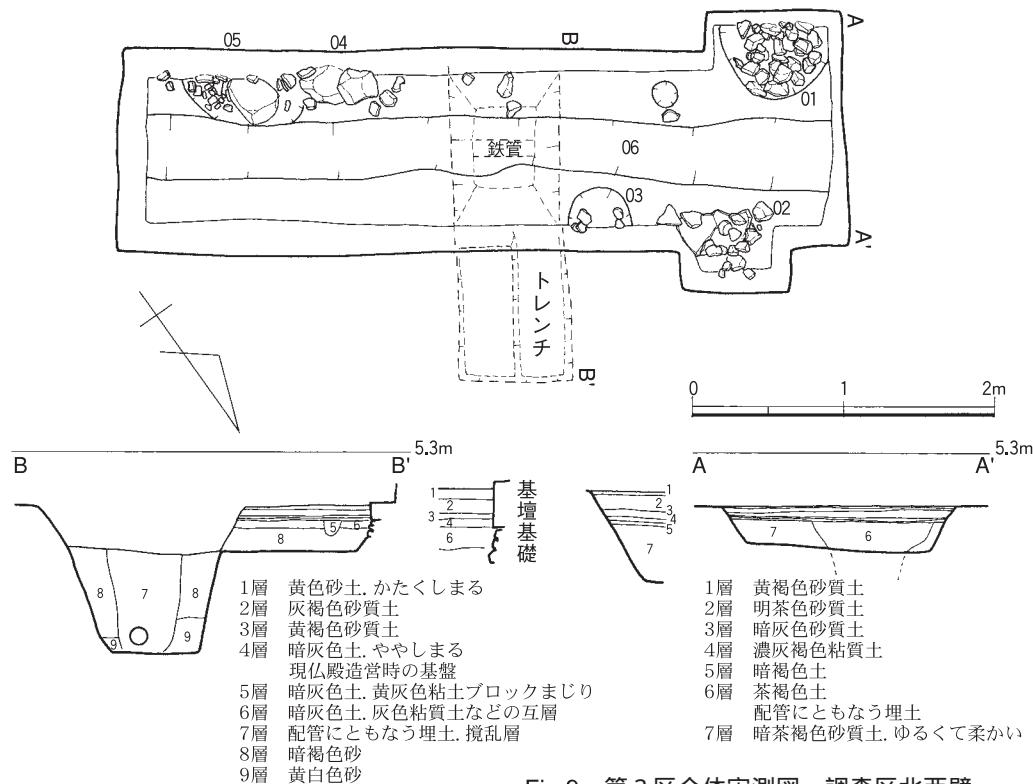


Fig.9 第3区全体実測図、調査区北西壁・
トレンチ北西壁土層実測図 (1/50)

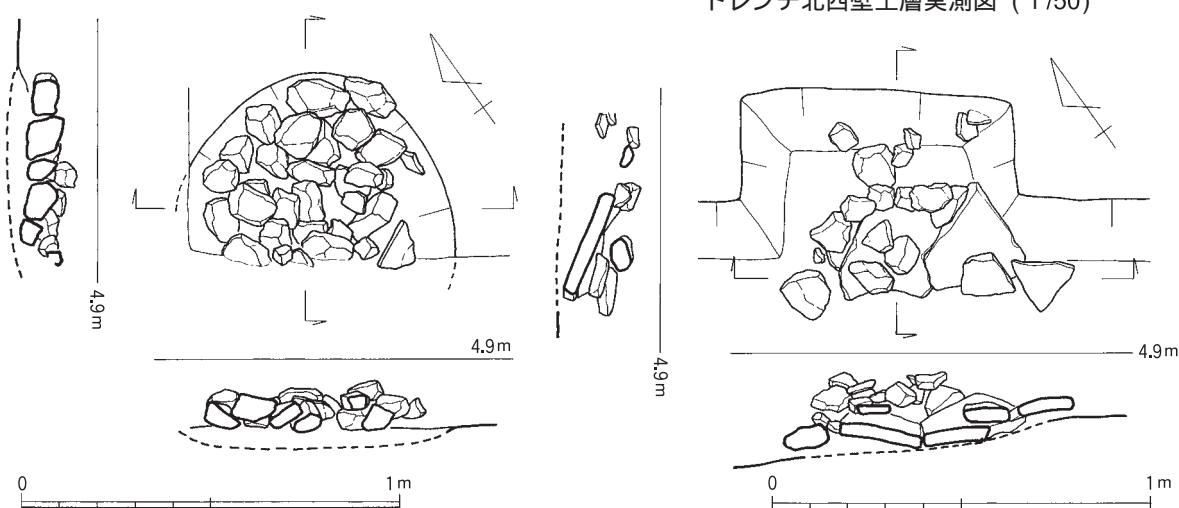


Fig.10 01号遺構実測図 (1/20)

Fig.11 02号遺構実測図 (1/20)

(4) 第4区

第4区は、仏殿の向かって右側面に設定した調査区である (16.2m^2)。

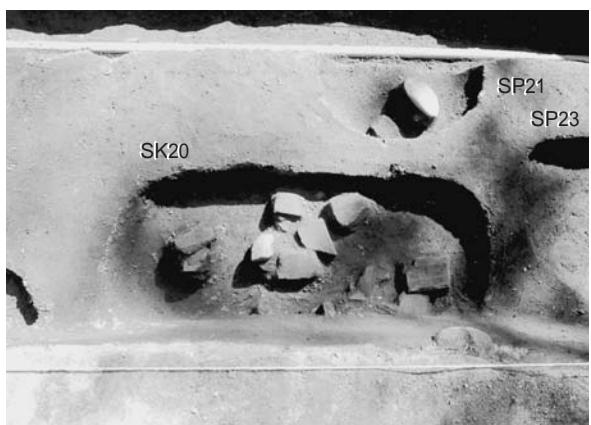
標高4.75mで、黄褐色粘土による整地面を検出した (11層)。粘土面は、調査区北側の2.5m部分に見られたのみであるが、調査区南側においても標高4.7m付近で、粘土の上面を覆う粗砂層 (9層) と同質の粗砂層が確認でき、一連の遺構面が広がっていたものと考えられる (上層遺構)。この遺構面では、ピット・土坑などを検出したが、上位から掘り込まれた遺構が少くない。なお、15号遺構、30号遺構は塩化ビニール管を埋置した配管溝、06号遺構は3区から続く鉄管の配管溝である。



Ph.15 第4区上層全景 (北より)



Ph.16 第4区下層全景 (南より)



Ph.17 20号遺構 (北西より)



Ph.18 27号遺構 (北西より)



Ph.19 35号遺構 (南東より)



Ph.20 第4B区土層堆積状況

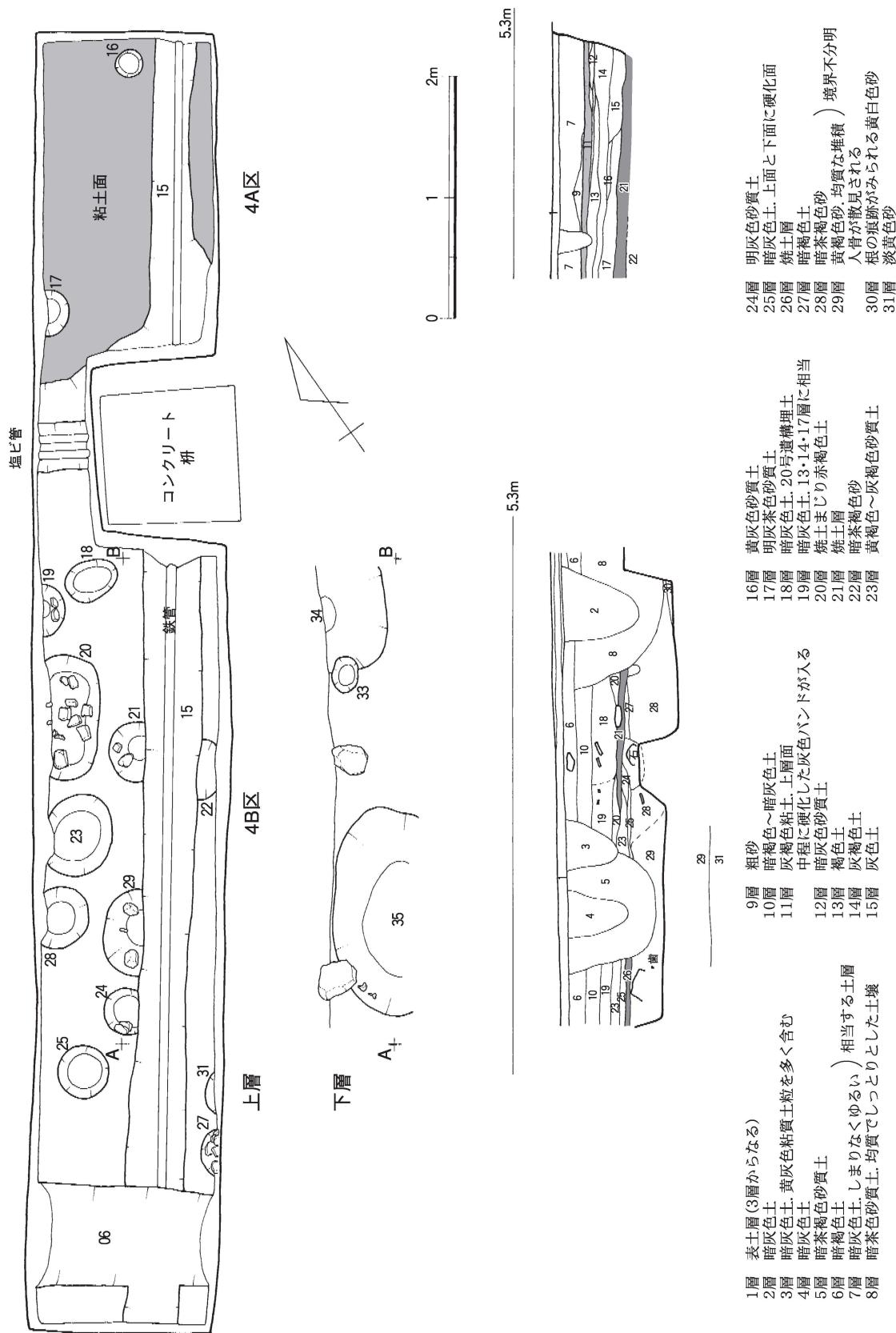


Fig.12 第4区全体実測図、調査区北西壁土層実測図 (1/50)

標高4.4～4.5mから、焼土層を検出した。粘土面と焼土層の間から出土する遺物は、小片が多いが、おおむね15～16世紀代に属する。また、上層遺構には16世紀代に比定できるものがあり、粘土面はおおむね16世紀に属するものと思われる。

焼土層は、焼け土を均した整地土層であるが、これに伴う遺構は確認できなかった。また、調査区中ほどから南側にかけては、焼土層の下位に2枚の硬化面と硬化面に先行する薄い焼土層が見られた。度重なる火災と、その後の整地、復興の一端を示すものであろう。下位の硬化面および焼土層直下の遺物は、おおむね13世紀代の土器・陶磁器・瓦であり、その時期としては、鎌倉時代を想定すれば大過ないと思われる。

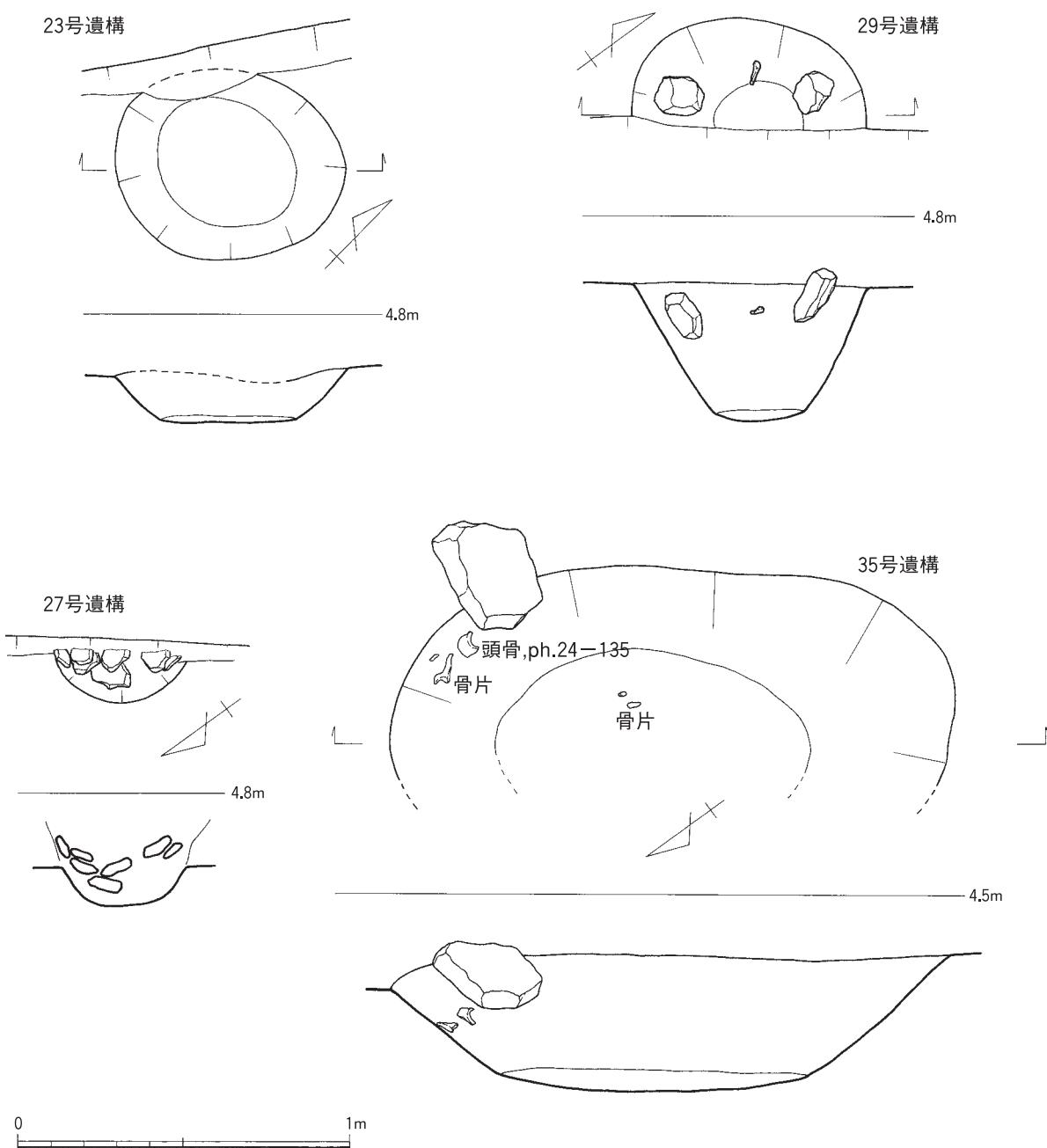


Fig.13 第4区遺構実測図 (1/20)

さらに焼土・下位硬化面を除去した砂層で遺構検出をおこなった（下層遺構面）。

標高4.3m以下は、茶褐色を帯びた砂層となるが、歯（成人・小児）、頭骸骨（小児）、部位不明の骨などがかなり朽ちた状態で出土した。明瞭な掘り方を伴わず、砂層中に散在する状況である。

なお、部分的に掘削して確認したところ、標高3.7mで砂丘上面の白色砂層を検出した。

18号遺構

上層で検出した柱穴状ピットである。土師器皿（Fig.16-47）瓦質土器火舍（Fig.15-31）青磁香炉（Fig.18-97）などが出土した。15～16世紀頃に位置づけられる。

23号遺構（Fig.13）

上層検出の柱穴状ピットである。土師器皿（Fig.16-38・40・44）杯（54・61）瓦質土器鍋（Fig.15-27）陶器壺（Fig.19-112）瓦片（Fig.21-125）などが出土した。16世紀代の遺構であろう。

27号遺構（Fig.13）

上層で検出した柱穴状ピットである。内部に石が意図的におとされており、柱の根固めと考えられる。土師器片、青白磁梅瓶片、土壁片などが出土した。

28号遺構

上層の柱穴状ピットである。天目茶碗片（Fig.19-106）、肥前染付け片、近世瓦片が出土した。

29号遺構（Fig.13）

上層で検出した柱穴状ピットである。土師器片、陶器片、瓦片、銅錢（Fig.23-144）、鉄釘が出土した。時期を限定するにはいたらないが、おおむね中世末から近世初頭の遺構と考えられる。

33号遺構

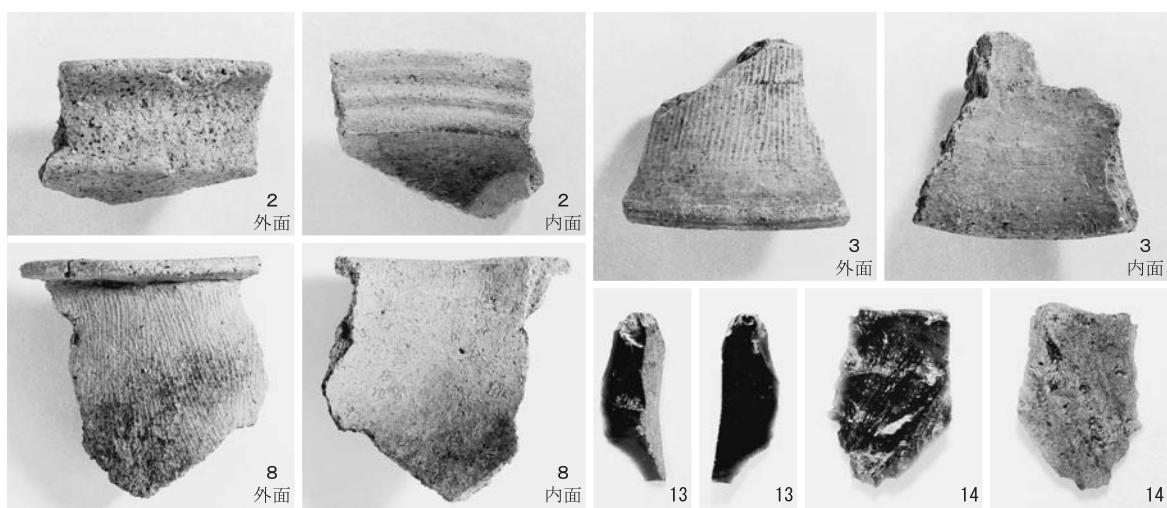
下層で検出した柱穴状ピットである。34号遺構を切る。土師器杯（Fig.16-60・66）、青白磁梅瓶（巻頭図版2-151・154）、青磁香炉片、陶器片が出土した。13世紀代に位置づけられよう。

34号遺構

下層で検出した土坑である。青白磁梅瓶片（巻頭図版2-149）石錘（Fig.22-132・133）が出土した。石錘は漁網用で弥生時代に遡る遺物である。遺構の時期としては12世紀代が妥当であろう。

35号遺構（Fig.13）

下層で検出した大型の土坑である。埋土はくすんだ色調の砂で、基盤砂層との境界は、やや曖昧である。埋土中から人骨が出土した（Ph.24-135）。聖福寺の創建以前にさかのぼる遺構であろう。



Ph.21 出土遺物 1

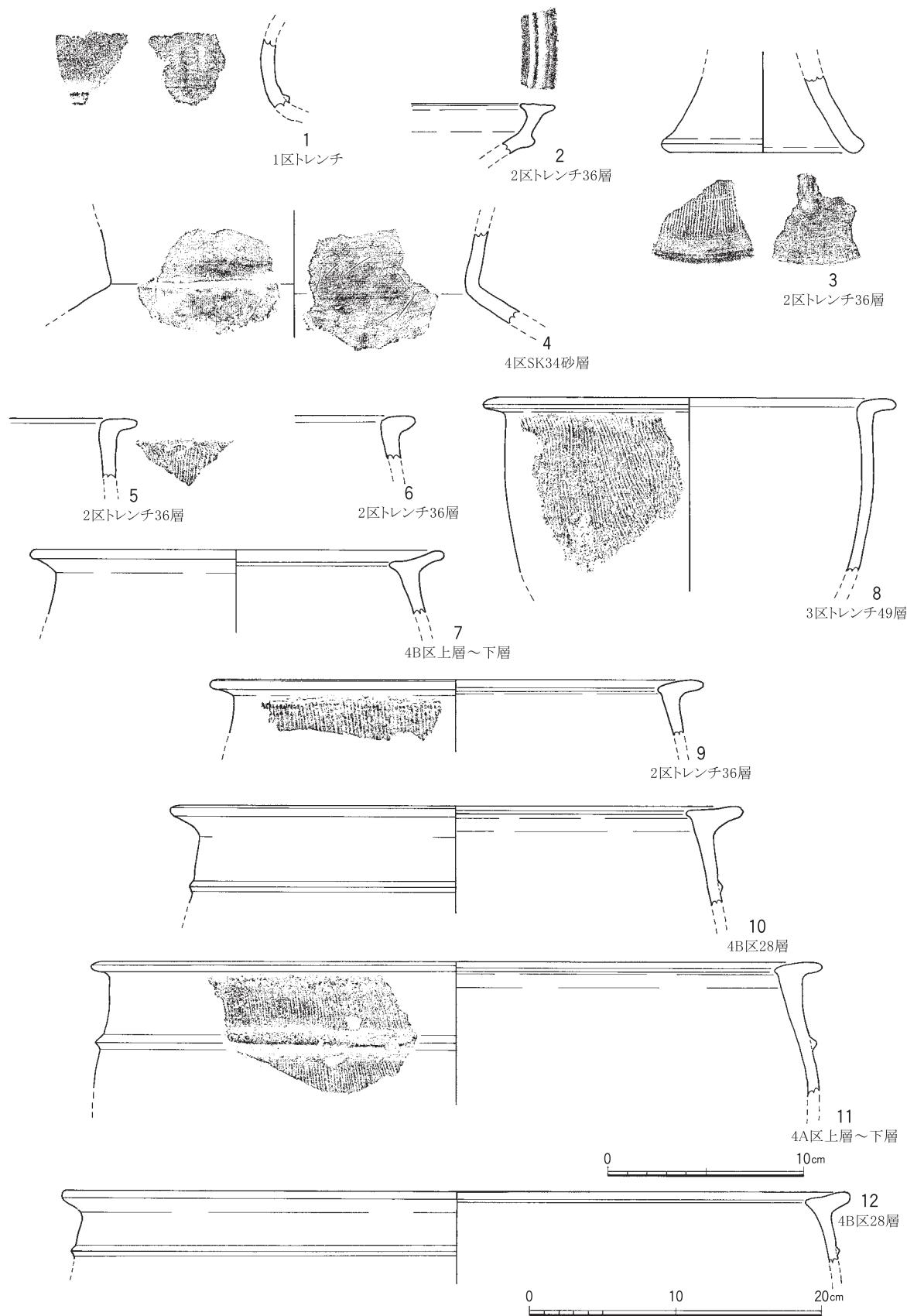


Fig.14 出土遺物実測図 1 弥生土器 (1/3, 12...1/4)



Ph.22 出土遺物 2

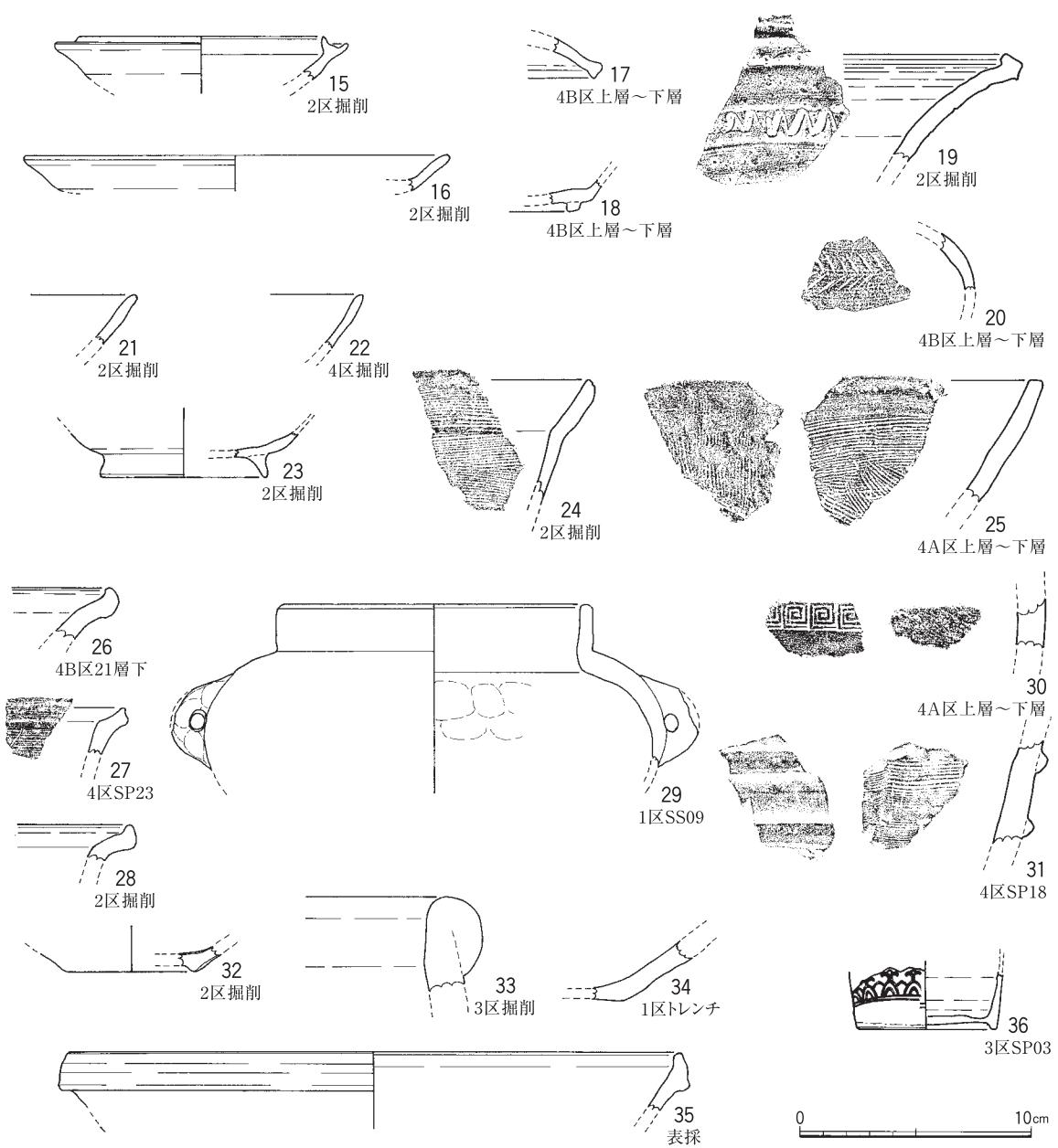


Fig.15 出土遺物実測図 2 須恵器、国産土器・陶器 (1/3)

3 出土遺物

弥生時代の遺物 (Fig.14、Ph.21)

各調査区の下層で検出した砂層中からは、弥生時代の土器片が出土している。1は壺の頸部で、外面は細かい縦刷毛目、内面は横方向に密なへら磨きをする。2は、山陽地方からの搬入土器で、高坏の口縁部である。3は器台である。外面には縦方向の刷毛目、内面は絞り痕になで調整が見られる。5～12は甕である。13・14には、黒曜石のチップを示した。13は長さ19mm、14は31mmをはかる。

須恵器 (Fig.15-15～69)

15は、坏身である。蓋受けのかえりが退化したタイプ。16は皿である。平底であろう。17は、坏蓋である。端部に、小さいかえりがつく。18は、高台坏である。19は甕の頸部である。波状文が刻まれる。20は腹である。肩部に刻線による羽状文が施される。

土師器・瓦器 (Fig.15-21～23、Fig.16)

23は、土師器碗である。内外面はなで調整で、10世紀代に位置づけられる。21は土師器碗で、内外

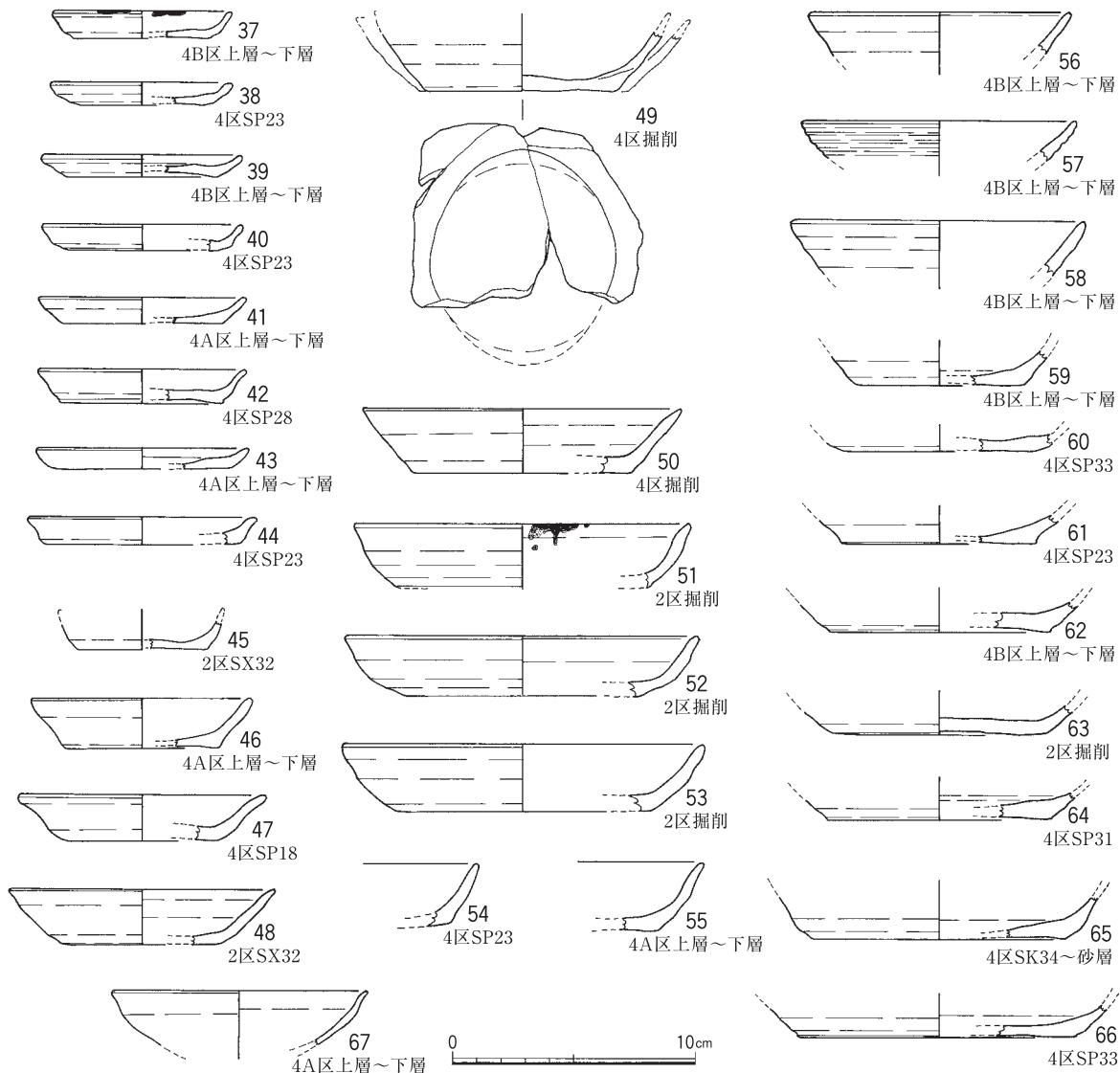


Fig.16 出土遺物実測図3 土師器 (1/3)

面にヌタ痕が残る。11世紀後半の所産であろう。22は、瓦器碗である。内面は単位が不明瞭な密なへら磨き、外面は横なので上に粗いへら磨きを加える。筑前型に分類される。12世紀前半であろう。

37～66は土師器の皿・壺である。底部はすべて回転糸切りする。49は、大きく橢円形に変形している。37・51の口縁部、63の内底部には油煙が付着し、灯明皿として用いられたことを示す。

国産土器・国産陶磁器 (Fig.15-24～36)

24・25は土師質土器の土鍋である。外面には、煤が付着している。26～31は瓦質土器である。26は

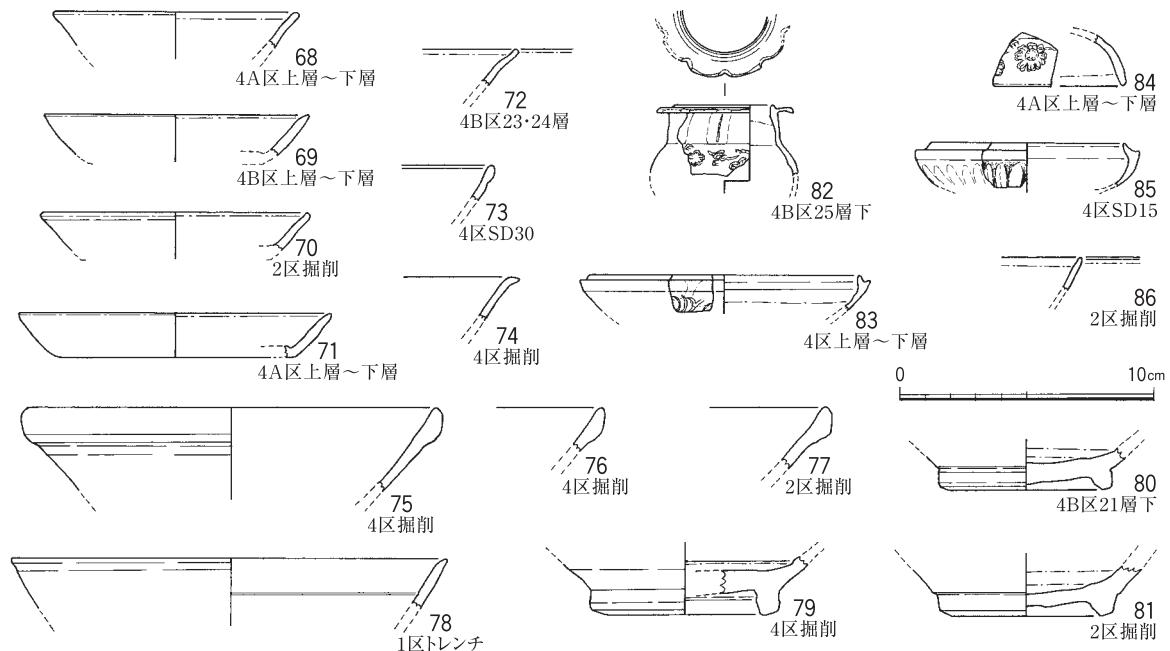


Fig.17 出土遺物実測図4 白磁・青白磁 (1/3)

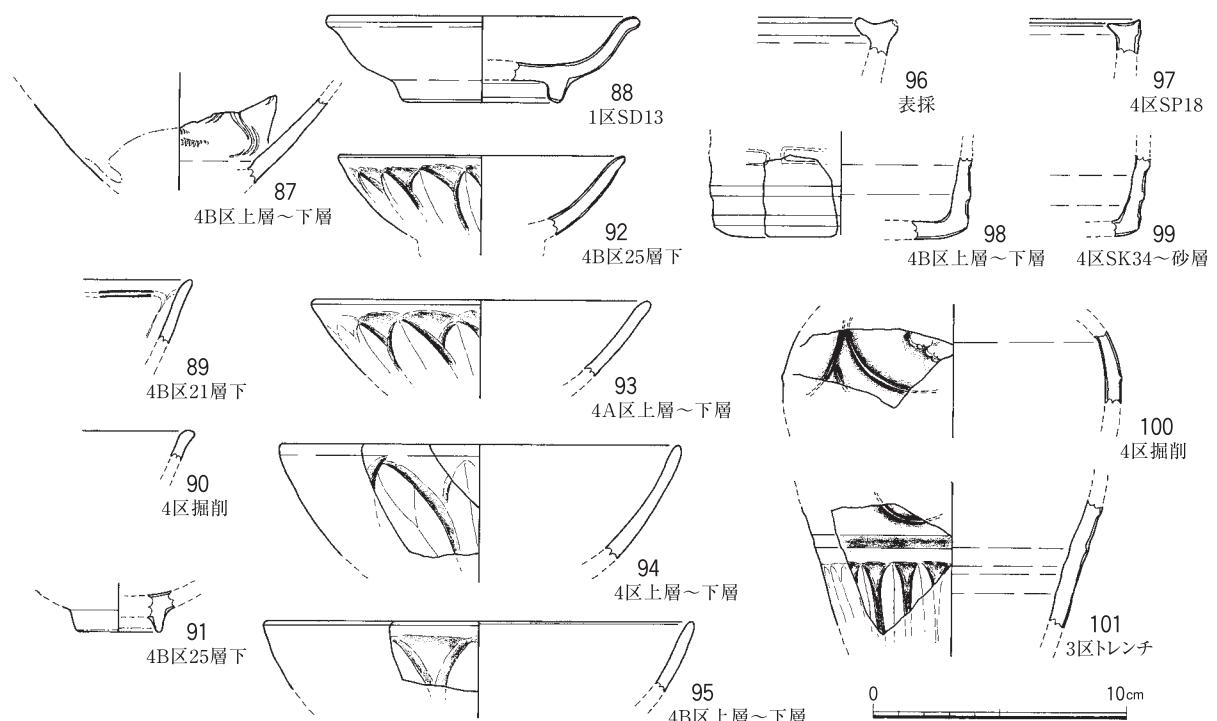
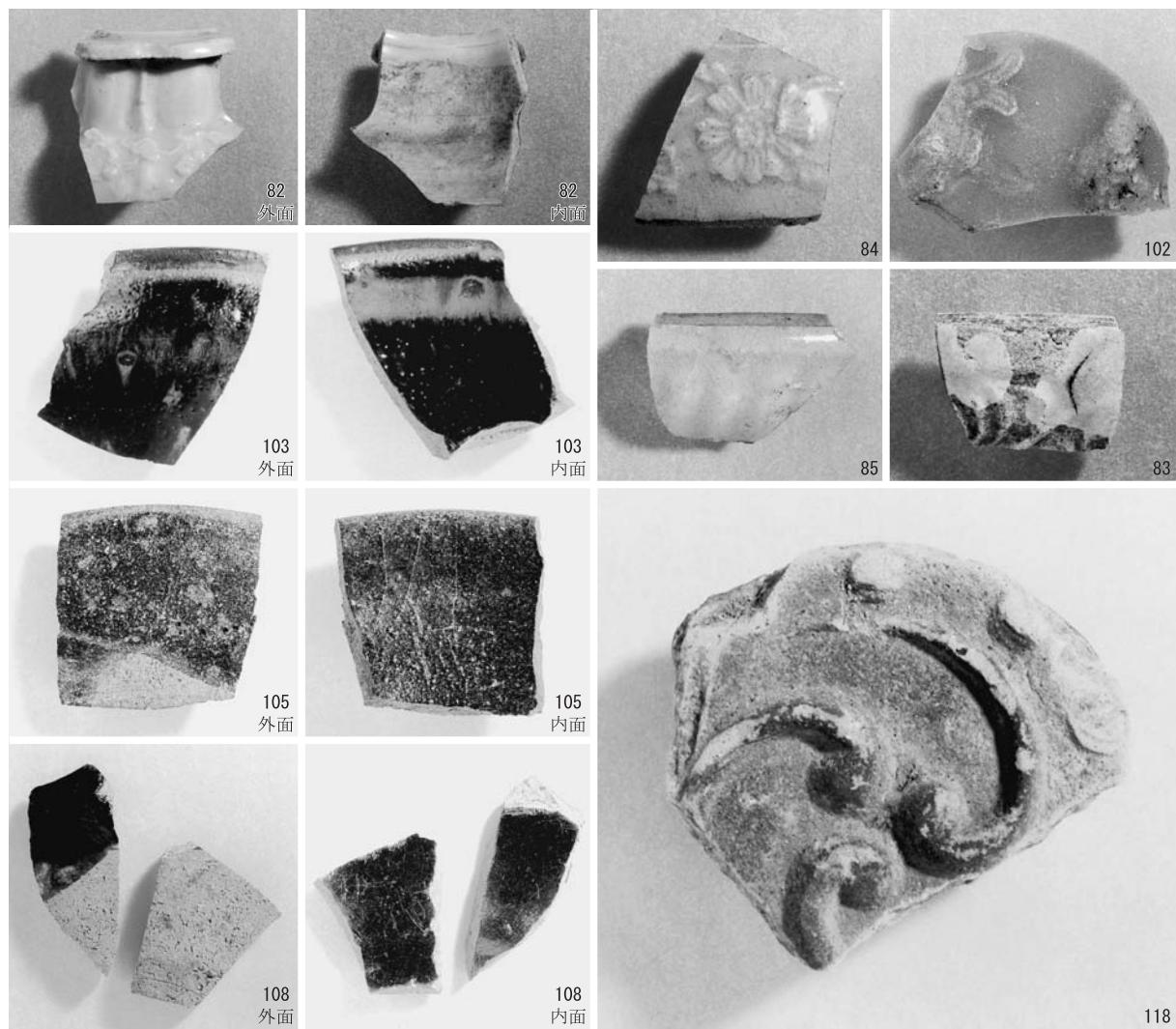


Fig.18 出土遺物実測図5 青磁 (1/3)



Ph.23 出土遺物 3

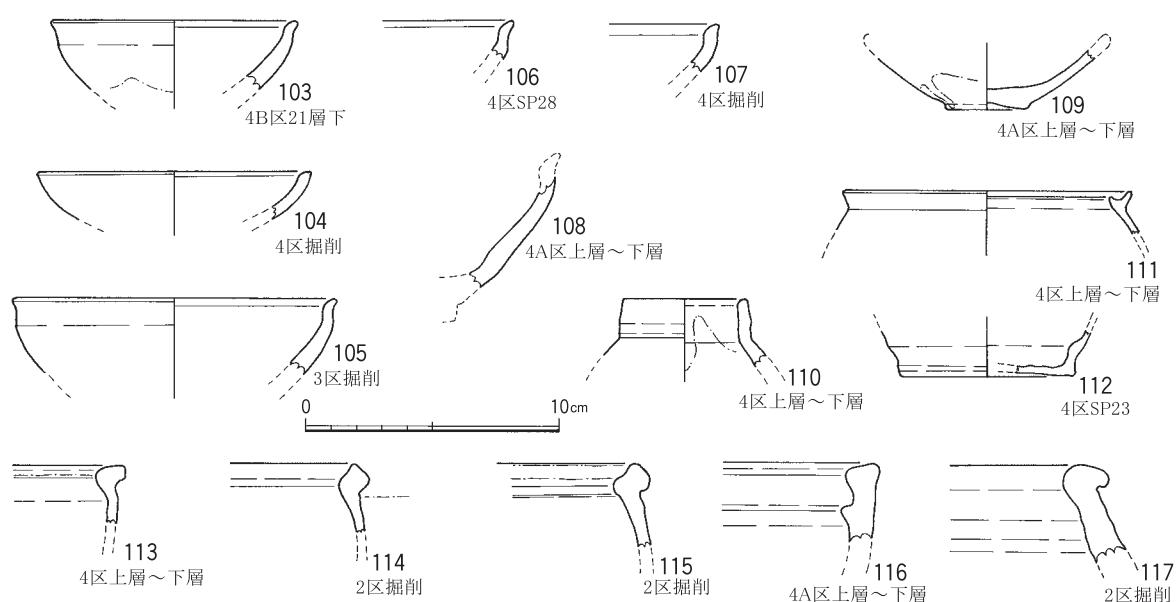


Fig.19 出土遺物実測図 6 陶器 (1/3)

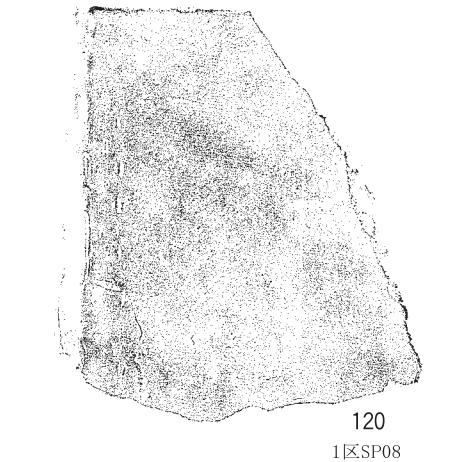
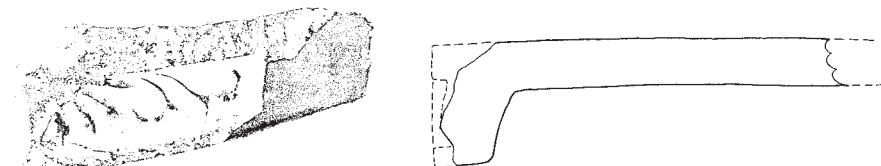
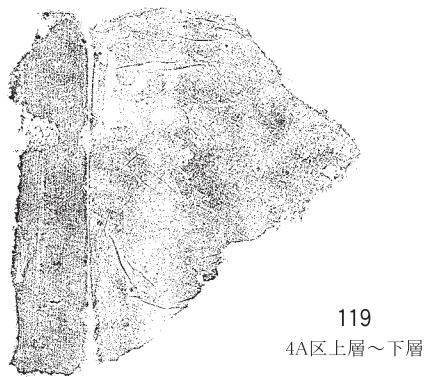
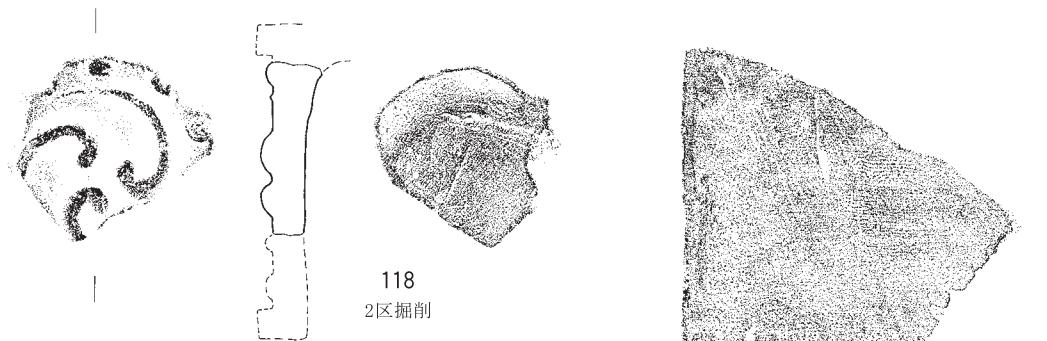


Fig.20 出土遺物実測図 7 軒先瓦 (1/3)

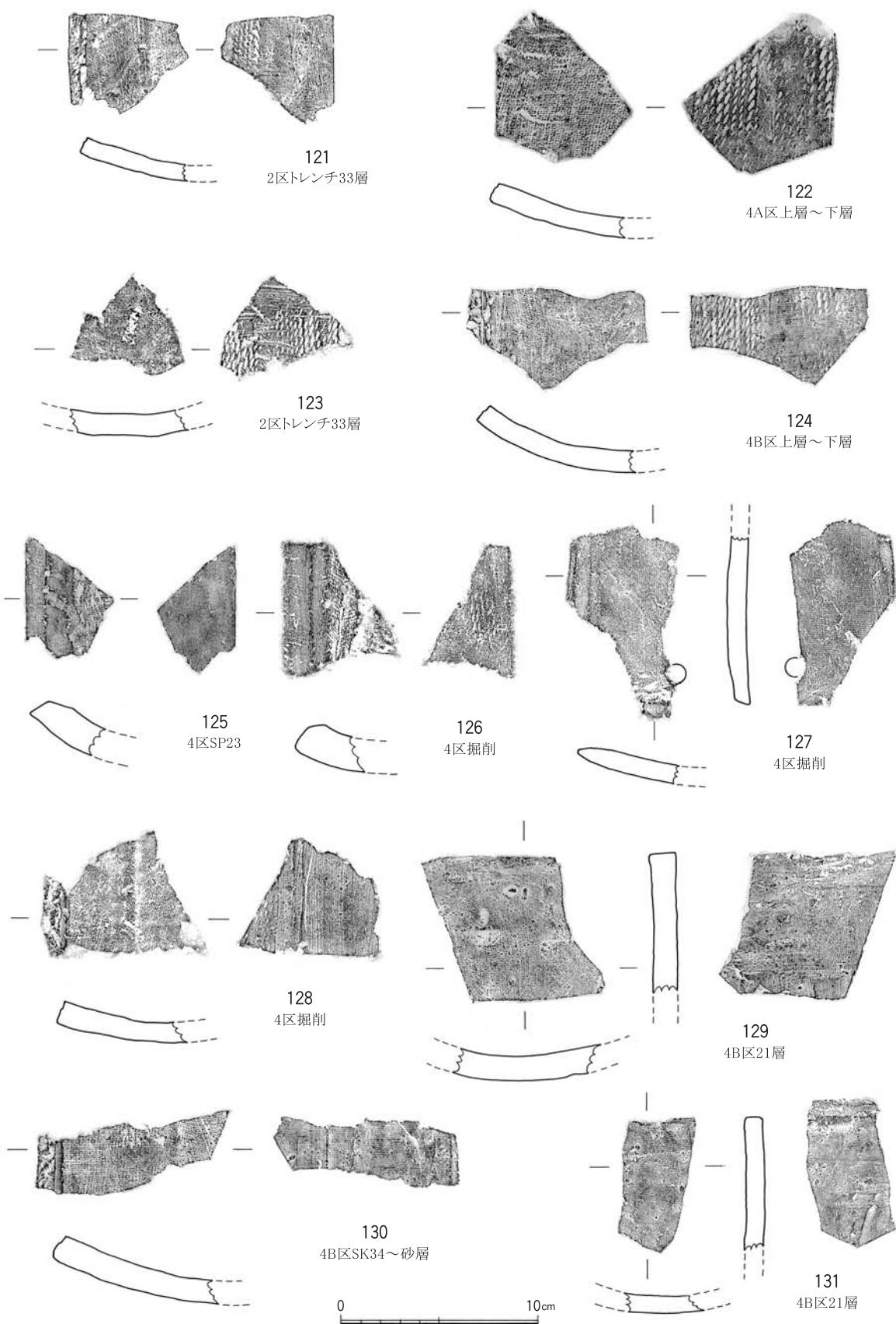


Fig.21 出土遺物実測図 8 瓦 (1/3)

壺の口縁部、27・28は鉢である。29は湯釜で、外面は全体に薄く煤けている。30・31は火舍である。

32は瀬戸の丸皿である。灰緑色の釉が施される。33は、備前焼の大甕である。玉縁口縁に作る。34・35は東播系須恵器のこね鉢である。

36は、肥前染付けの瓶である。染付けはプリントで、左右ですわっている。外面に施釉、内面は露胎である。

白磁・青白磁 (Fig.17、Ph.23、巻頭図版2)

68~83は白磁である。68~72は皿である。施釉後、口縁部の釉を削り取って、口ハゲにつくる。73~81は碗である。73は、口縁部を小さい玉縁に作る。79~81は、見込みを削り取って輪状に露胎とする。82は、印花文の小壺である。薄作りで精緻。83は印花文の合子の身である。外面の釉は十分に行きわたらず、零状に残っている。口縁部は露胎で、内面の底側には釉が施されている。

84~86、148~152は青白磁である。84は合子蓋で、印花文が見られる。口縁部は露胎となる。85は合子の身である。菊花状の印花文が配される。148~152は、梅瓶の破片である。複数固体分あると思われるが、小片のみで明らかではない。

青磁 (Fig.18、Ph.23、巻頭図版2)

87は、同安窯系青磁碗である。87以外はすべて竜泉窯系青磁である。88は高台付き皿で、外底部は露胎とする。92~95は蓮弁文碗である。96~99・153~155は、香炉である。複数固体に分かれようであるが、いずれも算木文の香炉と思われる。100・101は、貼花文の花生である。102は双魚文を貼花した小鉢の底部である。畠付を露胎とする。

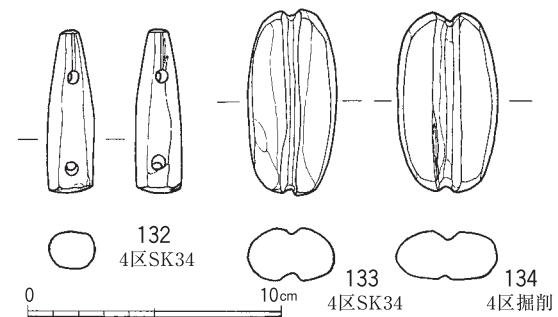


Fig.22 出土遺物実測図9 石錘 (1/3)

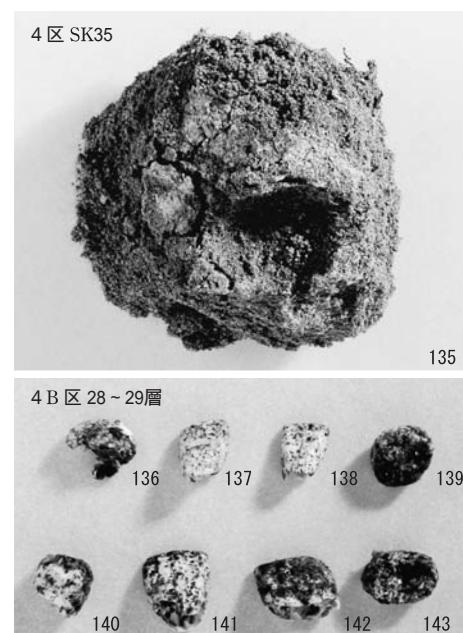


Fig.24 第4区出土人骨

135 - 眼窩 幅26mm 高24mm
141 - 幅9.5mm 長11mm

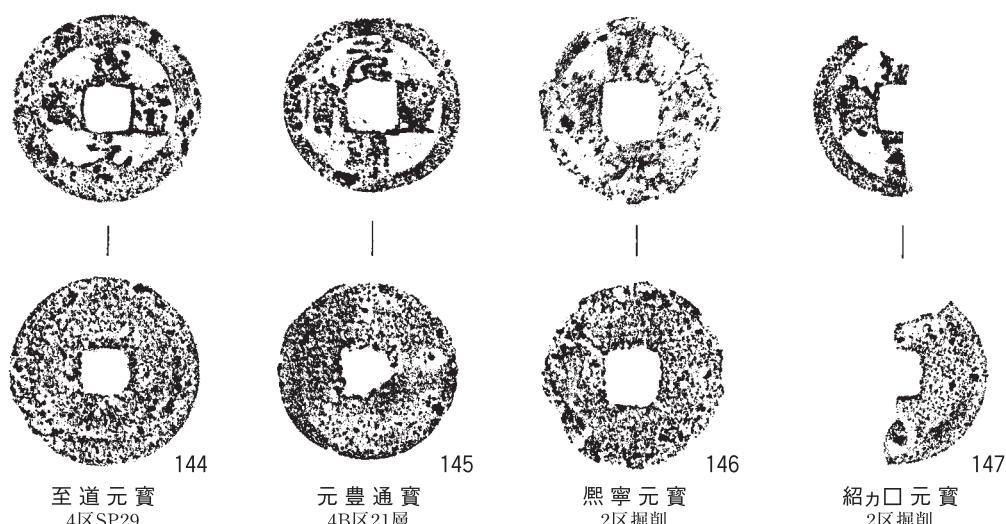


Fig.23 出土銭貨拓本 (1/1)

陶器 (Fig.19、Ph.23)

103～108は天目茶碗である。胎土が暗灰色を呈するもの（103・105・107）と、灰色を呈するもの（104・106・108）がある。すべて中国産で、国産天目はまったく出土していない。109は皿である。褐釉を漬け掛けし、底部は露胎となる。110は瓶である。緑灰色の釉を施す。111は、鉢であろう。口唇部から外面に、黄褐釉をかける。112は壺である。外面露胎で、内面には黒褐色の釉が薄く均一にかかる。113～115は鉢である。113は内面、114は内面と体部外面、115は口縁部内面以外にオリーブ色の釉をかける。116は黄灰色釉のこね鉢である。117は緑褐釉を薄く施釉した甕である。

瓦 (Fig.20・21)

Fig.20に軒先瓦、Fig.21に平瓦を示した。118・119は中世、120は近世に属する。121～124・128～131は、博多遺跡群に特徴的な押圧文系軒瓦にともなう平瓦片である。127には釘穴が見られる。

石製品 (Fig.22)

132～134は石錘である。132は凝灰岩、133・134は滑石片岩製である。

人骨 (Ph.24)

135は小児の頭骨である。右眼窩から鼻骨、右側頭部の一部が遺存している。136～143は歯である。小児・成人の歯が出土している。このほか扁平な部位も見られたが、遺存状態はきわめて悪かった。

銭貨 (Fig.23)

4点が出土した。すべて北宋の銅錢である。145の孔には鋳造時のバリが残る。

第三章　まとめ

限られた面積・期間での発掘調査であり、基本的に下層まで掘り抜かない前提で実施したため、十分な情報が得られたわけではない。特に各調査区における土層の堆積状況に共通する要素が少なく、近接した調査区であるにもかかわらず、全体的な理解が困難となっている。

最もまとまった情報を得た第4区を例に取ると、12世紀以前は、自然砂丘が露出していたものと思われる。砂層中に人骨が散見できたことから、砂丘が遺棄葬の場となっていた可能性がある。これは、博多百堂の伝承を裏付けるものと言えよう（3ページ参照）。

明瞭な遺構面が形成されるのは、13世紀代である。これは、聖福寺の創建時期と近く、それまで土地利用がなされていなかった地域が、聖福寺の寺域に取り込まれたことを示すといえよう。焼土層と硬化面の形成は、火災と復興を物語るものとして注目されるが、その後、16世紀と見られる粘土整地面まで、明らかな地業の痕跡が残っていないことは疑問である。

同様なことは、他の調査区においても認められる。すなわち、聖福寺の創建から近世に至る歴史の中で、火災と再建は繰り返されたはずであるが、いずれの調査区においても明瞭な地業面はほとんど検出できなかった。しかも整地層を含む中世の包含層は薄く、60cm前後に過ぎない。また、砂丘砂層の標高を周辺の調査区と比較すると、190次調査地点は標高3.7～3.8mで、明らかに高い（Fig.4）。

これらのことと合わせて推測すれば、聖福寺は、もともと砂丘の高い部分を選んで創建されたもので、その後の復興・再建に当たっては、その都度大規模に旧地盤を削平して、すなわち地面を削り均して地盤を更新したものと考えざるを得ない。

その結果、過去の仏殿の基盤を形作ったであろう整地層は、ほとんど失われてしまい、遺構としても残らなかつたのである。

参考文献

大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市博多を掘る』海鳥社 2008年
福岡市教育委員会『聖福寺の建造物』福岡市文化財叢書第2集 2007年
福岡市博物館『栄西と中世博多展』図録 2010年

福岡市教育委員会『博多 - 博多遺跡群第30次調査の概要 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第149集 1987年
福岡市教育委員会『博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第205集 1989年
(築港線関係4次)
福岡市教育委員会『博多27 - 博多遺跡群第48次調査の報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第282集 1992年
福岡市教育委員会『博多48 - 博多遺跡群第62次調査の概要 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集 1995年
福岡市教育委員会『博多53 - 博多遺跡群第71次調査の報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第450集 1996年
福岡市教育委員会『博多60 - 第1次、4次、8次調査報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集 1997年
福岡市教育委員会『博多66 - 博多遺跡群第94次聖福寺塔頭順心庵・第106次発掘調査報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書
第593集 1999年
福岡市教育委員会『博多80 - 御区所疎開跡地道路関係埋蔵文化財調査報告書 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集 2002年
(第102次、107次、120次調査)
福岡市教育委員会『博多91 - 博多遺跡群第130次調査報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第762集 2003年
福岡市教育委員会『博多99 - 博多遺跡群第140次調査報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第808集 2004年
福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財調査年報 VOL.22 - 平成19(2007)年度版』2009年(第177次調査)

博多 143

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1126集

2011年3月18日発行

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 城島印刷株式会社

福岡市中央区白金2丁目9-6
